

研究通信

1967.8刊

村落社会研究会
事務局

豊橋市町畠町
愛知大学文学部
社会学研究室内

北海道村落社会論ノートより

黒崎八洲次良

北海道への来住人口が毎年五万人をこえ、その約半数が農業移住であったのは、ほほ明治三十一年代から四〇年代のことであった。大正一昭和一〇年代も来住人口は毎年五万人をこえていたが、農業移住者が絶えず人口の五割をこえることはなく、漸次その比率を低下させて昭和一〇年代にはその二割をこえることはなかった（齊藤仁）。それゆえ、北海道の村落社会——とくに農村社会の展開過程の起点において、その構成単位である「家」の主要部分が日本資本主義の成立——発展期（桜井、大島ほか）、近代的法秩序の確立期（潮見ほか）に、府県村落をなれて渡道、入植したとみてよいであろう。この時期の「家」はいかなるものであったか。いかなる条件のもとに存在したのか。村落の生成、展開の過程をみると、その成立の事情がきわめて重要であって、以後の展開の性格を大きく規定しているかにみえるので、まず、この問題をとりあげることにする。

神谷力は「明治以後における『家』制度研究の最も重要な課題の一つは、この族団や村落のもの『家』の支配、統制力が明治初年以来の上からの制度的改革と下からの資本主義經濟の発展によって、どのように変容し弛緩したか、それとともに「『家』ひいては戸主の地位がいかに伸長したかを明らかにする」ことで、そのことは同族重視論を再検討することになる」という。中野卓は近代日本の村落において「家々が独立しえなかつたこと、独立しなかつた家がそれでも近世の家とは異なる時代的特質をもつ家であることは確かであろう。家単位の自立度は増した。……それは、かつての家がそれのかつてもつっていた特質を薄められた形で示すようになつたというのではなく、新しい特質を示す家にかわつたとみる方が精密な分析を可能にしよう」という（村落社会研究第二集）。

さきにのべた問題をもつわれわれは、昨年の年報での両氏の提言に強くひきつけられた。神谷のいう「『家』ひいては戸主の地位」の伸長と、中野のいう「家単位の自立度」の増加は新しい特質を示す家と同じ意味内容をもつかどうかは、はつきりしない。しかし、北海道村落において「一面識ダモナキモノ、只契約ニ依リテ其業ニ從事スル」地主家と小作農家とは近世の家ではなくて、新しい特質を示す近代の家であろう。ここでは、地主、小作関係の成立当初には、この家関係は近隣的、人格的、面接的なうらづけをともなうすべをもたなかつたことは言うまでもない。そういううらづけなしに地主小作関係が成立するためには、いかなる条件が必要であったか。その条件こそ、明治後期の農民分解を單に所有上の分解という

だけなく、没落して離村する家を著しく増加させた（安孫子騒）ものであろう。分解が所有と經營の分離を意味するだけでなく離村の一因となつたということは、明治後期以降の家と村落を特長づけることの一つであろう。そして、それが東北村落から京浜や北海道への挙家離村の一因となつたことは意義ふかい。

北海道に入植した家も明治末・大正期には激しく移動して、定着性にとほしかつた。猿津兵村の場合、「屯田退転者の続出は屯田兵相互の社会関係が基本的に対等であつて、ほぼ互格に出発した屯田一世が他家の庇護に従属することを歓迎し」なかつたことが一因であった（森岡清美）。そのことは不在地主が支配的であつた小作制農場の小作家や団体入植の各家にも該当すると思う。すなわち、農家相互の社会関係が基本的に対等であつたのが、明治後期の北海道村落の一般事情であったようである。

府県村落においてはどうであつたか。「部落規約が明治二〇、三〇年代、新市町村制確立直後に多く成文化され……、住民総体（実は戸主総体）の平等な取扱いを強調」し、「部落の協議、執行の主体」は「家格に固着した有力者」から、「各戸平等に選挙や輪番でそれを担当する形に移行変質して來た（竹内利美・安孫子騒）。また「戸数割には必ずしも家格の差があらわれていない」（島田隆、矢木明夫）のである。実質的にはともかく、形式的には家と家の関係は少からず平等・対等なものになつていたし、政府もまた農民の身分差別を廃止したのであった。

実質的にはどうか。本家の意味が近世・明治前期とそれ以後では

大いに変化したのである。「江戸時代に分家を出し得た農家は、家業經營が比較的大規模であつたとともに、貸付の所有土地が多い自作地主であったのに、明治・大正期には小農でも分家が可能になつてきた」（有賀喜左衛門）。分与財産が一戸の独立に十分でなく、本家の家業經營の規模が小さくてそれへの参加による給付や庇護がなくとも、地主の家への出入り、各種の貢労録や兼業などを通じて貧しい家生活を維持することができる。そういう分家と本家の間には社会的地位に大差がないし、両者が結ぶユイも小農的ユイリ対等・平等のものになりやすい。そういう分家が多く創設されたし、古い分家もこれと類似した性格をもちやすい事情にあつたのが明治、大正期なのであつた。本家という言葉は、ここでは、「分家の主人が生れ、育つた家」（有賀喜左衛門）を意味するようになる。

家主借屋関係、地主小作関係、金穀貸付関係などがそれまでのよう奉行人分家や頼み本家による分家を創出しにくい事情もあつた。一つには手作りをはじめとする地主家の家業經營が縮小しつつあつたこと。一つには明治民法が支持した「家＝家族制度」（中野卓）が分家を親族分家に限定していいたことによる。それだから、右の関係もせいぜい契約関係からせいぜい個人関係的なオヤカタ、コカタ關係に限定されやいものとなつた。とすれば、近代において再編成・新形成される同族団は近世のそれにくらべて縮小されたものでありやすかつたし、本家支配型であるよりも決定的に本家分家仲間型（大竹秀男）が多くなつたとみてよい（有賀喜左衛門）。そして本家分家仲間型の同族団であつても、近世と近代とでは質的に異つて

いる。それは先述のように生活慣習上でも、公的諸制度上でも本家の意味が、したがって分家や親類・親族一家の意味がことなつて規定されているからである。

さて、他家の関係において右のようだ規定された家はどうであ

ったか。公的制度と家業經營のあり方から規定されて、家員を家長の親族関係者一家族員に限定するようになつた。家員の数は減少したが、その生活保障という重い機能は家業という形の縮小された經營を通じて達成するよりほかなく、家の主宰者である家長（戸主）の義務はかえつて強化されるようになったのではあるまい。家はその機能を達成するために、自らと同じようにタヨリない他家との間に、生活上の諸契機にもとづいていろいろな共同組織をつくり、参加しなければならないという事情は依然としてのこつた。

すなわち、近代において再編成された共同組織のなかで家々は独立しえなかつたのである（中野卓）。それだから、北海道においても農家は葬式組、地神講などから部落にいたるいろいろな共同組織をむすんだ。マキとかシルイというタームを使用することはないが、同族団をも結んでいるのである。

さらに、この時期の家々は日清・日露の二つの戦争を経験してい

る。戦争に直接参加する、しないにかかわらず、それを通じていろいろな全国的な価値、規範を共有するようになつたと思うが、どうであろうか。これもまた府県村落から北海道や京浜への人びとの移動を円滑にしたであろう。

われわれは北海道村落の成立、展開過程を問題にしておきながら、

付記 紙幅の関係もあって引用させていただいた諸先生方の敬称、論稿名は略させていただいた。御謹承を乞う。

御教示をうけた。そこでこのいささかあらすぎる素描を試みた次第である。

村研・在京編集・運営委員会（第四回）

期　　日　　六月二日 午後六時より
場　　所　　壇　書　房

出席委員 小池基之・福武直・中野卓・蓮見音彦・布施鉄治・
安原茂・米地実・柿崎京一

議　　事

一、村研年報第三案の編集について

年報掲載原稿の確定および掲載順序を次のようにきめ、壇書房に原稿を渡した。

村落社会研究 第三集 目次

明治期志摩漁村の構造と再編過程

後藤和夫

明治二十年代における海苔株の解放運動と村落

柿崎京一

島地改革による村落体制の変化

安孫子麟

村落の再編過程と権力構造

菅野正

山村社会の展開と山村労働組合

吉沢四郎

議事

いわゆる末子相続について

内藤莞爾

資料 遠賀川改修工事関係区有文書

研究動向

原宏

- 一、大会報告者の確定および報告順序について
自由報告、共通課題報告のテーマと順序を別記のように決定。

二、その他

経済学における村落研究の動向

小池基之

社会学における村落研究の動向

安原茂

法律学における村落研究の動向

江守五夫

史学における村落研究の動向

利谷信義

二、本年度大会の件について

島田隆

共同課題報告者は左記の四氏に依頼することに決定した。

中野卓（東京教育大） 島崎稔（中央大） 木下謙治（鹿児島

大） 東北大のどなたか。

三、その他

次回運営委員会を六月二一日におこない、自由報告の申込者リストを整理して、本年度大会のプログラムを作成する予定。

村研・運営委員会（第五回）

(2) 共同討議の運営について

共同討議をヨリ一層充実してもらいたいという会員からの要望も寄せられています。運営委員会では、従来の反省にもとづき、期待にそなへく運営について検討を加えています。つきましては、共同討議の終了時刻まで全参加者が討議に参加されますよう、是非はじめから予定をくんで下さるようお願いします。

大会日程、プログラムは左ページ下段以下参照

出席委員	小池基之・福武直・中野卓・島崎稔・運営委員会東京連絡所から柿崎京一が書記役として参加
期場所	六月二一日 午後六時より 塙書房

会員動向

第一五回村落社会研究会大会

(所属・住所変更)

岩見国夫 宇部中央高校より広島文化女子短大(広島市外)
祇園町長束 広島文化女子短大社会学研究室へ

所属変更。

菅野正 福島大学より宮城教育大学へ所属変更。住所は

変りません。

小林文人 九州産業大学より東京学芸大学へ所属変更。住所は
所は東京都国立市富士見台団地三一四〇四号。

高山隆三 東京都杉並区永福三四六へ転居。

武田良実 長野県阿南高校より飯田高校に所属変更。住所

も長野県下伊那郡上郷村高松 飯高住宅に變ります。

守屋嘉美 仙台市木町通七九 菅野方へ転居。

(住所番号変更)

余田博通 大阪府箕面市桜ヶ丘一一四一二七

(新入会員)

北原龍二 東京教育大 千葉県柏市豊四季九三七一

公団住宅一六一五〇六

(会費納入)

森酒齐井藤靖俊正雄
二一五〇〇円
二一〇〇〇円
五〇〇円
二一五〇〇円
北原龍二
一五〇〇円
中野卓一
五〇〇円
柿崎京一
五〇〇円
北原龍二
五〇〇円

第一日 (一〇月五日㈬)

開会 午前一〇時 愛知大学(豊橋市町畠町)

自由課題報告・討議 午前一〇時半~午後三時半

一、日系農民とブランル社会 藤村美和子(東教大)

二、村落社会から地方都市の地元社会へ—東京湾における礫粉製造業の展開—(千葉県五田保の幕末~明治期の事例研究)

三、末子相続慣行について—カトリック農家を中心として—
(長崎県北松浦郡田平町) 内藤莞爾・土居平(九大)

四、西ドイツにおける村落改造—Dorfsanierungと
Dorferrneuerung—
総会・懇親会 午後七時~九時 伊良湖国民休暇村 しなさい荘
高山隆三(慶大)

第二日 (一〇月六日㈭)

共通課題報告・討議 午前九時~午後四時

共通課題「村落構造の変化に対する推進力」議長 小池基之(慶大)

一、共通課題の趣旨について 小池基之(慶大)

二、幕末における商品經濟の発展と村落構造の変化(仮題)

守屋嘉美(東北学院大)

三、大正期を中心とする一漁村の再編とその推進力—石川県七尾

市北大呑地区旧庵村の場合——（仮題） 中野卓（東教大）

四、畠地灌漑事業に対する村落の対応——鹿児島県大隅半島笠原台地の場合—— 木下謙治（鹿児島大）

五、戦後農村社会の構造変化とその諸条件について（仮題）

島崎稔（中央大）

六、共同討議

事務局より

暑中お見舞申し上げます。みなさまには、ますます御健勝のことと存じます。左記の点、よろしく御配慮下さいますようお願い申し上げます。

☆村研大会への御参加の有無について

本年度の大会は、前記プログラムのよう開催されます。大会第一日は午前、午後とも報告・討議を愛知大学（東海道本線・新幹線、飯田線・名鉄本線いずれも豊橋駅下車、市内バスで約一〇分、タクシーで約五分）でおこない、夕方から貸切バスで渥美半島伊良湖岬国民休暇村しおさい荘にまいります。同夜と第二日の全日程は、しおさい荘でおこなわれます。しおさい荘へは豊橋駅前から半島本線バスで約一時間二〇分かかります。

十月といいますと観光シーズンでもあり、旅館の融通もあまりきかないと思いますので、大切な時期が早くて恐縮ですが、同封の葉書に御記入のうえ来る八月一〇日必着で、御返事いただきたいと存

じます。御返事のない場合には欠席として扱わなければならないこともありますので、お忘れなきようお願い申し上げます。なお、前日（四日）の夜から御来豊の方々には、豊橋駅前の愛大特約青山旅館（二食付一五〇〇円前後）に御案内いたします。また二日目の夜もしおさい荘におとまりを希望される方（二食付一二〇〇円前後）もお申し出下さい。

☆大会報告レジュメ発行について

大会報告のレジュメを、自由課題・共通課題とも、九月下旬には全会員の手元にまとめてお渡しするつもりであります。御報告者には九月一五日がギリギリの〆切になります。御多忙のところ恐縮ですが、〆切の期日を厳守していただくとともに、大会の成果がより豊かであるよう、全会員の御検討をお願いいたします。

☆村研会費の納入について

村研の財政は、昨年度事務局の竜野先生の御努力でかなり整理されましたが、まだ多額の未納額をかかえております。六七年度分をふくめて、貴殿の会費納入状況は同封別紙のとおりです。多額の未納分をおもちの方はここ数年分でも、とりあえずお払い下されば幸です。納入は郵便振替（口座番号東京八〇二二七、名称村落社会研究会）をお願いいたします。なお、別紙記入額に疑義がございましたら、御一報いただければ幸です。

村落社会研究会会員名簿(2)

卷之三

小林文人	東京学芸大学	東京都国立市富士見台四丁目地
小松三郎	堺市堺高校	大阪府羽曳野市植生野二九一丁一
小松洋一	東北大學大学院	宮城県栗原郡類峰町二九一丁一
小山	東京都立大学人文学院	東京都目黒区自由ヶ丘一七一
小山陽一	立命館大学産業社会	京都府乙訓郡長岡町今里川原久保四二一三九
今野敏彦	立正学園女子短大	東京都葛飾区本田中原一〇一木方
(サ)		島田幸三郎
齊藤正二	日本大学文理学部	島田隆
齊藤考	日本三育学院	島本彦次郎
齊藤吉雄	東洋大学社会学部	清水由文
酒井俊二	東京都世田谷区岡本町一二六七	菅野俊作
坂井達朗	横浜市保土ヶ谷上川井町	白井尚
阪井敏郎	仙台市連坊小路三一〇	山梨大学学芸学部
桜井徳太郎	東京都中野区沼袋町	立教大学第一教養部
大坂女子大学	東京都杉並区桃井三一三一	仙台市鈎当台通り二七
東京教育大学文学部	東京都新宿区坂町一一	大阪府南河内郡登美丘町
農林省水産庁水産資源科	東京都板橋区志村中台町三七七	福岡市香嵐御幸町
日本福祉大学	宮城県宮城郡多賀城町	京都府公務員住宅四一二
佐々木徹郎	仙台市片平町一四	東京都東山区山科竹鼻壱前一七
佐々木泰雄	神奈川県平塚市八幡一九四三	東京都練馬区大泉学園町
佐々木秀雄	農林省農業土木試験場	札幌市外月寒西一条五丁目
佐藤喜一	北海道大学文学部	東京都杉並区大宮前四一五六九
佐藤勉	東北大学大学院	仙台市新琴似町一〇六四
(シ)		仙台市平野町
塩入力山梨大学	仙台市靈屋下一二〇 岩井方	園田恭一 お茶の水女子大学 東京都世田谷区成城町九〇四
(ソ)		東北大學文学部社会学研究室
執行	鳳	九州大学教養部
篠原武夫	東京医科大学国	福岡市箱崎町九大教養部
島崎稔	中央大学文学部	千葉県市川市北方町三一九三七
島田幸三郎	東京大学文学部	東京都西多摩郡羽村町羽二〇二
島田隆	東北大学文学部	仙台市小田原北三番丁通り五
島本彦次郎	関西学院大学社会学部	豊城市向山町官有地住宅三九
清水由文	愛知大学文学部	西宮市甲子園口六一四九
菅野俊作	東海林仲之助	仙台市勾当台通り二七
白井尚	山梨大学学芸学部	宮城県厅農業改良課
立教大学経済学部	立教大学第一教養部	甲府市千塚町一九三六一
鈴木広	仙台市鈎当台通り二七	福岡市香嵐御幸町
角節郎	大阪市立大学大学院	京都府公務員住宅四一二
住谷一彦	九州大学文学部	京都府登美丘町
(セ)	竜谷大	京都府公務員住宅四一二
立教大学経済学部	東京都東山区山科竹鼻壱前一七	東京都練馬区大泉学園町
西能ケ田三二三	東京都新宿区坂町一一	札幌市外月寒西一条五丁目
関清秀	北海道大学文学部	仙台市鈎当台通り二七
関敬吾	東洋大学	東京都杉並区大宮前四一五六九
(ソ)	立教大学経済学部	仙台市平野町
園田恭一	立教大学経済学部	東京都東山区山科竹鼻壱前一七
お茶の水女子大学	立教大学経済学部	東京都練馬区大泉学園町
東京都世田谷区成城町九〇四	立教大学経済学部	仙台市平野町
(ソ項終り)	立教大学経済学部	立教大学経済学部